

悠久の河

29

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

ひみつ

「そ、そうで有ったのか」
彌兵衛の顔色が変わった。
「でもね、お父さんは、おじいさまのことが大
好きなのよ。お母さまがおじいさまのことをち
ょっとでも悪く言うと、お父さんは、すぐ怒
るのよ」

彌兵衛は驚きを隠しきれなかつた。
そして、いつか五郎太が言つていた言葉を不
意に思い浮かべた。

——勘六さまは、ときどき、どこかへ通つておら
れます。どこへ通つておられるのでしょうか。
——

「そうで有つたのか……」

彌兵衛は、目頭が熱くなつた。

「そなた、つると言つたな。つるにも苦勞をか
け、寂しい思いをさせたのであろうな」

「寂しいことなんてないよ。わたしね。おじい
さんには会いたくなつたら、いつもここに走つて
来るの」

「ふん、ふん」

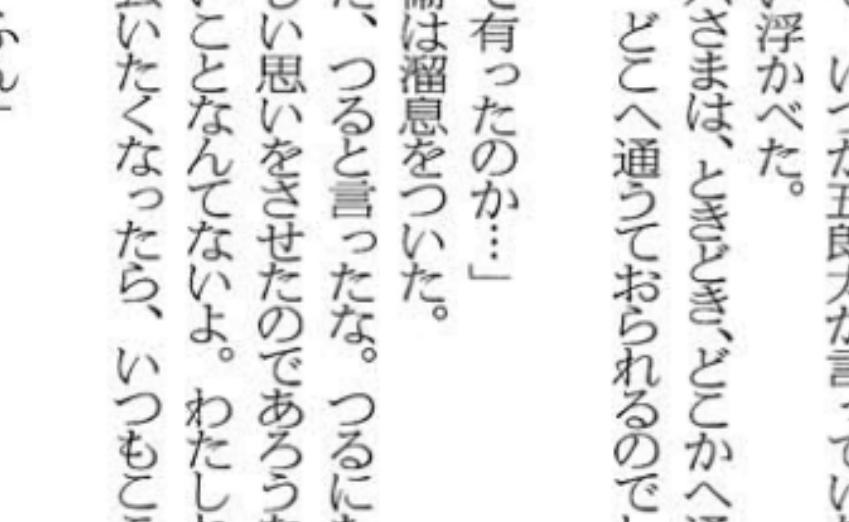
孫娘のつると出会つてからの彌兵衛は、まる

で人が変わつたように穏やかになつた。

道行く人にも彌兵衛の方から声をかけ、農作
物の出来具合を聞いたり、その人の家族の安否
を尋ねたりした。
「庄屋の旦那さまは、最近人間が丸くなつてこ
られた」
「顔付きが、すっかり変わつてしまわれた。や
さしくなられて、仏さまに近こうなつてこられ
たのだろうか」

彌兵衛の急な変わりようを村の人たちは、不
審に思い戸惑つていた。

幼い子どもを連れている老人を見掛けると、
彌兵衛は、子どもの歳を尋ねたりして声をかけ
話し込むことさえもこのごろでは珍しいことで
は無かつた。



画 寺戸良信